
クラスメイトと同居とか現実的にありえない

K R I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラスメイトと同居とか現実的にありえない

【Nコード】

N9841H

【作者名】

K R I N

【あらすじ】

主人公・鳳来志信はいろんな事情により一人暮らし、そこに同級生・美夜原リユウがやってきて……

（前書き）

楽しんでいただけたらなと思いますwww

八月下旬、夏休みの終了が間近に迫り、宿題と言う名の休みを奪い去るための教員たちの送り込んだ刺客との戦いを制した俺

鳳来^{ほうらい} 志信^{ししん}は刺客との開戦以来、カロリーのお友達しか食べていない。口の中はパッサパサで、こうなると食べがいのあるものが食べなくなる。

冷蔵庫には賞味期限が切れてはいないものの明日とか今日の日付のものがあつた。

賞味期限は当日でもセーフだろ。

そんなわけで調理開始！！

ちなみに、僕は一人暮らしだ。

僕が高校入学を機に、親に対して

「一人暮らしがしたいです！！」

と言ったら本当にすることになった。

この様子だと僕が一人暮らししたくって言ったみたいだが、事實はそうじゃない。

僕は四人兄弟の末っ子で、親が日本をひっぱる大企業の社長と国会議員なので、

すこぶる金持ちだ。

そのため、いまだに上の二人の兄は実家暮らし。たった一人の姉はもう自立しているのだが、

この兄貴どもは実家の設備や本物のメイドたちに鼻の下を伸ばしている所為でいっこうに実家を離れようとしない。

そして何より僕を邪魔扱いしていて、拳句の果てには

「第一回、韓国のりと韓国の李を当てるゲーム」

を圧倒的に僕の不利なアンパイアで開催し、負けた僕は罰ゲームとして、

「一人暮らしがしたいです!!」

と言ったのだ。

結果、僕に対して放し飼いをしている犬のような扱いである両親は

「いいよ。」

と即答。

せめて少しは

「なんでだ!!?」

とか

「そんなの不安だからダメ!!」

と言ってほしかったなあ。

まあ、僕自身に心配要素がないってことは自覚できていたからな。小学校の時に料理を教えてもらおうとしたら、親父の会社が経営する高級レストランで修業させられたから大抵の料理はできるし、勉強もやればできる。

友達はいないから女の子との接点もない、よって家に女の子を連れて上がるようなこともない……あれ? なんだか涙が出てくるぞ? タマネギは刻んでないのに……。

なんだか、悲しい気持ちになってきた。

なんで友達ができないんだろう。僕に悪いところでもあるのかな……。ピンポン

そうだったのはインターフォン、一体誰だろう?

姉さんから彼氏が持ってたエロビデオが送られてきたのかな?

しかし、モニターに映っていたのは……

「み、美夜原 リユウ（みやはら りゆう）!!」

クラスメイトの美夜原 リユウ、髪を後ろで二つに束ねたツインテールでその状態でも腰ぐらいまでの長さがある。そして、まだ子供っぽい顔だけど美人に見えるいわゆる美少女だ。

「どどどどどど、どうしよう。」

僕はどうしていいかがさっぱり分らない。

普通の男子でこんな美少女がいたらすぐ家に通すだろう、でも、でも、

美夜原 リユウだけは別だ。

僕は彼女のことを影では「剛腕」と呼んでいる。影って言ってもブログだけだ。

美夜原 リユウはこの歳になってもまだ男子に喧嘩で勝てるってものばらの噂で、しかも学年のほぼ半数の男子が彼女の舎弟だということ……ひいひいひい。

「こ、ここは大人の対応をしないと……殺される。」

僕は恐る恐る電話機を取る、モニターにはあの「剛腕」が…。

「ひゃ、ひゃい、ほうりゃいでしゅ。」

「な、何緊張してんのよ…、気持ち悪いわよ。」

お、女の子っぽい声だけど…恐怖を感じる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、どめんなさい。」

「四回も言わんでいい！！そして最後までめんなさいになってる！！」

「…な、なにか御用件が御有りなのでありますでしょうか？」

「あ、あのさ、鳳来……。」

そう言つて「剛腕」が静かになる。

僕は何か彼女が恨みを買うようなことをしただろうか？

思い出せ、思い出せ、でないと僕の命が危ない、多分「剛腕」はかは波が使えるに違いない、殺られる、殺られる前に思い出さなきゃ……。

あつ、まさか、僕がブログで「剛腕」だと呼んでいるのがバレたのか、やばい、やばいぞ、どうにかしないと……

「あのさ、きよ……。」

「剛腕」がしゃべりだすと僕は警報を鳴らした。

「ちよ、な、なにこれ、何の警報？なんか警備員がたくさんで、私！？え、なんで、ちよ、鳳来！！あんたなにやって、ちよっと、私は怪しくないですよ、多分誤作動で……ちよ、やめなさいよ！！持ち上げないで、っていうか何人来てんのよ！！ここ警備員でうまつてるじゃない！！……ぷつつ。」

これで、僕の平和は守られた。

ナイス判断、ナイス決断、きつと天皇様にも褒められるよ。

数分後、大分味付けも良くなったな、あとは煮込むだけ……。ピンポン

またインターフォン、今度は玄関のやつだから、お隣さんかな？さっきの警報を謝らないと……。

「はい。」

ガチャッ。

「鳳来……。」

ガチャッ、ガシャン。

「ちよ、なんで私の顔見たとたんにドア閉めんのよ！！？鍵まで閉めてるじゃない！！！」

「ふう、死ぬかと思った。」

なんであんなところに「剛腕」がいたんだろう？追い払ったはずなのに。

ガン！ガン！

あれ？玄関を立ち去ったのに、玄関の方から音がする。

ガン！ガン！

「ちよ、剛腕……じゃなかった、美夜原さんドアに暴力を振らないで！！蹴らないでください！！！！それ壊れたら修理費がかかるんですよ！！！！」

ガシャーン！！！！

「あー！！！！手遅れだったか！！ちくしょー！！」

玄関でただの厚い鉄板となり下がったドアの上に足を置いている「
剛腕」はまさに……

修羅！！

ダメだ…もう僕を守る手段がない……攻撃姿勢を見せれば確実に殺
られる。

僕は何をすればいい…いや、今僕のすべきことはただ一つ……

「ごめんなさい！！」

膝まづいて許しをこつ、僕の最終奥義、「DOGEZA」

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！警報鳴らしたり、ドア急に閉
めたり、「剛腕」って呼んだりしていませんでした！！許してく
ださい、許してください！！」

「……「剛腕」って何よ？」

僕を見下している「剛腕」が…へ？

「「剛腕」って誰の事かしら？」

「それは当然目の前にいる…みぎゅふっ！！」

僕の視界に入った拳は迷うことなく僕の顔面に激突した。

「粗茶です…。」

僕はそう言ってお茶を差し出す。

あろうことか剛腕に。

「あの、ごうわ…美夜原さんは一体どんな用件でここに？」

「あんだ、剛腕って言おうとしたわね。」

音を立てずにご、美夜原さんが立ち上がる。

口が滑った！ああ、腫れたほほが痛む……。

「すいませんすいませんすいません。」

僕の必死のお辞儀のおかげか、また椅子に座ってくれた。

「はあ、こいつの私に対するイメージは最悪ね……。どうすれば良
くなるのかしら。」

最後の方がよく聞き取れなかった。

「あのう、どのような要件で……。」

「ああ、そうだったわね。えっと、その……。」

あれ？急に黙り込んでしまったぞ？

なんだか、言いづらそうって感じだなあ。

……僕に一体何を要求するんだろう…金か？金か？金か？

「…鳳来、私……。」

志信の予想 私、新しい凶器がほしいからお金をよこしなさい！

「私を……」

あれ？予想と違うぞ？

私を……

「私をここに泊めて……！」

「はい？」

顔を赤くしてまで美夜原さんが言った言葉は僕には理解ができなかった。

「ちょ、ちょっと待って……え？へ？え？何？なんでばくにそんなお願いを……いや、違う、多分美夜原さんは僕の脳では到底理解できない未来の言葉を使って、僕をだましてこの家、いや、一族をも乗っ取って……は……！分かったぞ……！親父の会社も、国会も従えて第三次世界大戦を起こす寸法だな……！」

「待ちなさい……！あんたの思考回路の方が理解不能よ……！なんでそんな結果に辿り着くのよ……！」

「ハッ……！ついテンパっちゃってて。」

「テンパってるってレベルじゃないでしょ……？違うにきまつてるし、話がそれすぎよ……！私を泊めるか泊めないかの話でしょ。」

話を聞くと、

「いろんな事情で家をなくしちゃったから、新しい家が見つかるまで泊めてほしい。」

だ、そうだ。

「いろんな事情って…。」

「それは聞かないで！！聞いたらただじゃおかないから。」
「ごめんなさい。」

そうだ、目の前にいるのは恐怖の塊…、どんな事情でも泊めるわけにはいかない…。

「他の家の人には頼めないの？」

「ナイスアイデア！！これで恐怖の塊はどこかに……。」

「夏休み中ずっと友達の家を回って泊っていたわ。」

…へ？

「それでね、一回目まではどの家も家族でもてなしてくれたけど、二回目以降は私が来たときに目で嫌がられたわ。」

なんだか哀愁が漂ってきた。

「この不景気だもの、仕方がないから友達の家泊るのをやめることにしたわ。で、あんたが金持ちで一人暮らしをしているって聞いたから、あんたの家に泊まるわ。」

「僕は許可を出していないような……。」

「……あんた以外には頼めないのよ……。」

「で、でも、だ、男女で一つ屋根の下って言うのはどうかな…。」

「大丈夫よ、あんたなんてぬいぐるみと同じよ。」

…つまり、置物…。

「…ま、マジでへこまないでよ…。たかが例えでぬいぐるみって言われただけで遺書を書き始めない！！」

美夜原さんはそう言っただけから遺書を取りあげた。

「それに、ぬいぐるみなんだからたまにギョツとできるし…。」

「ギョツと僕の首を絞めるの！？」

「な、なんでそんな解釈するのよ！？」

「ち、ちがうの？」

「はあ、とにかく、あんたのことは気にならないから……でも、あんたが気になるっていうのなら…。」

「微塵もない。」

ギョッ！！

「絞めてる！！首！！か、かああ。」

「さっきの言葉を訂正して、私を泊めると断言しなさい。そうすれば、私に対しての数々の無礼を許して、ついでに首を解放してあげるわ。」

な、なんて女だ！人の首を絞めているのに笑っている…。

「……前言…てっ…かいします……。……泊って…いい…です…。」

「それにしても、良くここまで登って来れましたね。」

「……何それ？その言い方じゃあ私がここまで壁をよじ登ってきたみたいに聞こえるんだけど？」

「え？違うの！？」

ゴスン！！

「かつ、み、鳩尾に……蹴りは……」
ボタン。

「……ばか……。」

この日から、
クラスメイトとの同居生活兼僕が恐怖におびえながら過ごす毎日が始まった。

（後書き）

こんな作品で申し訳ない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9841h/>

クラスメイトと同居とか現実的にありえない

2010年12月22日02時52分発行